
空バカの行く絶望に染まるソラ

望夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空バカの行く絶望に染まるソラ

【Nコード】

N1272V

【作者名】

望夢

【あらすじ】

宇宙に散ったフラッグファイターが、今度は絶望に染まるソラを往く。

やはりチート物はネタが思い着かない為、書き直す事にした。色々、勝手を済まないな、フラッグファイターの諸君

prolog(前書き)

あまりにもモチベーションの低下が著しい為、息抜きに書かせてもらった。

prolog

2314年――

人類は試されていた。

イオリア・シュヘンベルグの示した『来るべき対話』の時がやって来たのだ。

「ちっ！」

舌打ちをしながらビームサーベルでELSが擬態したジnkス？を切り裂く。

機体を変形させて高機動戦に移行する。

彼我勢力差は圧倒的だが、私達の背には地球がある。一步も後ろには引けないのだ。

「トランザムッー！」

トランザムを起動し、ELSの群を一時的に押し返す。高濃度GN粒子が、戦場に散り逝く擬似太陽炉搭載機のGN粒子が、私の脳量子波に干渉し、頭に人の魂の叫びと、ELSの声が響く。

「っ、ぐ、これしきのことです！」

機体の3割りは既にELSの浸食を受けている。

「……これは、死ではない。これは人類を、対話へ導く為の——」

スキャナーが私の網膜をスキャンし、粒子生産量が爆発的に高まる。

トランザム・バースト——

機体の粒子化を繰り返し、超巨大ELSを眼前に捉える。

その近くではダブルオークアンタが超巨大なビームサーベルで超巨大ELSの表面を切り裂いていた。しかし、超巨大粒子砲の直撃すら耐えたバリアのような物に、ビームサーベルは阻まれてしまった。身体感覚がなくなっていく、だがサイコフレームを通じて機体はまだ動かせる。

「少年！ ソラ！」

「グラハム！？」

後方からグラハムの駆る機体がトランザム状態で猛追してくる。そ

の機体もまた、ELSに浸食されていた。

「未来への水先案内人は、このグラハム・エーカーが引き受けた！」

「……ならば私もその片棒、担がせてもらおう！」

「ソラ……」

「往くぞ、フラッグファイター！！」

「了解した！」

グラハムと通信が繋がる。

2人してほぼ同じように身体をELSに浸食されていた。そのままでは直に完全に浸食されるだろう。

「これは死ではない！」

「そうとも！私達の意志を、私達の戦いを、後の世に伝える為に！！」

「そうだ！これは、人類を導く為の——」

「私達フラッグファイターの——」

「戦いだッ！！」

その日。人類の試練と戦いは終わりを告げた。

人々はE.L.Sと共存の道を歩み、長らくの平和が続いていく。

そして過去の歴史は様々な形で後世に伝えられていったが、その中でも特に語り継がれていったのが、平和の象徴たる戦う為のチカラ『ガンダム』と人類を導く旗『フラッグ』であった――

第一話 3度目のイノチ

西暦1975年 9月10日

私は3度目となる生を世に受けた。

私の自意識が完全に目覚めるのに半年程かったが、その間は起きているのか寝ているのかはわからない、夢現だった。しかしニュータイプである私の拡張された意識は、半年間の身の回りの出来事を私に伝えていた。

私の両親――

父はロシア人、母は日本人であるらしい。故に私はロシアと日本のハーフである。

心は日本人、肉体はロシア系であった前回の私を鑑みれば、ちょうど良い立場なのだろうか？

しかし両親についてのらしいと言うのは、父は私が産まれる前に死んでしまったらしいからだ。

そして母も、私を産んで死んでしまったらしい。

当然親の居ない私は産まれて一夜にして孤児となってしまった。

誕生日といい、孤児といい、ここまで来るとさしもの私も、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない。

そのまま半年間は病院で世話になったが、1歳を迎えると私はとあ

る家に預けられる。

母の姉夫婦の下へだ。

しかも驚いたことは、星乃家は、この世界では身分は低いが、かなり歴史ある武家であるらしいとのことだ。

しかし、義父上の格好で、ここがどの様なところなのかは一発でわかった。

白い法衣のような服。帝国斯衛の正装であった。

つまりMuv-Luv UNLIMITED又はAlternativeの世界――

トップをねええ！とタメを張れる死亡フラグ乱立の世界だ。

いや、技術レベルから言えばこちらの方が死亡率は高いか……

なにせ2001年にこの世界の行く末は決まる。

地球を人の住めない星に変え、たったの10万人を逃がすのか、10年の時間稼ぎをするのか……

どちらにしろ、まともな終わりはないだろう。

ELSと違い、私達を自然災害程度にしか思っていないこの世界の敵、Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race――人類に敵対的な地球外起源種――

通称『BETA』。

質疑応答は出来るが、対話など絶望的だ。なにせ向こうはこちらを生き物と見ていないのだから……

そして、20世紀最後半と見れば、この世界の技術は以上発達しているが、24世紀に比べれば見劣りする。ましてや私達が変わった24世紀とは比べものにならない。

私が3度目の生を受けた理由はわからないが、なにもしなくても20年と少しを待てば運命は決まる。

しかしそれでいいのかと考えれば、答えはNoだ。

3度目の命、矜持を胸に力を振るった私だ。世界の為に力を振るい、桜花の如く華々しく散るのも良いだろう――

ならば話しは簡単だ。

幸いにも、曲がりなりにも、私は武家の人間であり、色こそ白だが、星乃家の政治的発言力はかなりの影響力を持つ。

ならば前回のようにな、ガンダムを倒す為に磨き上げた刃、此度は人類の敵である物の怪を母たる大地から根絶やしにする為に磨き、振るってやろうとも！

このソラ・ビャーチェノワ改め星乃空^{ほしのそら}が、フラッグファイターの矜持と技術屋魂を持って――！！

第一話 3度目のイノチ（後書き）

かなりむちゃくちゃであるが、一話目はこんな具合だ。

25年で何が出来るのか？

第二話 神童故のお家事情

一念発起、決意新たにした私ではあるが、たったの1歳でやれる事は、先ずは集中力を鍛えることと、体力をつけることだ。

精神の集中力は、齢60代に片足を突っ込み、軍人であつた私には赤子の手を捻る以上に容易いことであるが、身体はそうは行かずに集中力は長続きしない。やろうと思えば長続きするが、やりすぎると気絶する。というかした。

その所為で義母上には多大なる心配をさせてしまったので、それ以来は程度を見極めて程々にしている。

体力に関しては、ひたすら走るのみだ。
ある程度身体が成長し、刀を再び握る時に、踏み込みの脚力を養いながら体力も着く。

しかし中身は既に3回の成人式を迎えようとも、成りは1歳の男児
↑ここはテストに出るから覚えておけよ？

スマン、変な電波を受信した。

つまり、約13年振りに本来の性別に戻れた事実は喜ばしい事だが、やはり違和感を感じることもある。

肩がこるほど重い胸はいずこやら、あの細いくびれや力を入れれば折れてしまいそうな腕、程良く筋肉のついた魅惑的な美脚――

客観的に自分の身体をイメージするからか、やはり他人目にも美女

だつたな……

1度目の人生の身体が世辞にも整っているとは言い難かった所為か、男に戻れたが未練のようなものが残る。

まだ1歳故にこれからどう育つかわからないが、そのあたりは両親の血を信じる他はない。

さて、そんな、他人からは激しくどうでもいいだろう未練を抱えながら、気づいたら風呂では肌のマッサージをしたり、気づいたら必要以上に肌の露出をしない服ばかりを着たり、気づいたら髪が長くなる方法はないかと義母上に聞いてみたり、おおよそ男の取る行動ではないことも若干混じりつつ、3度目の生を受けてから3年の月日がたとうとしていた。

「義父上、重要な御話しとの言伝を承りましたが、如何様な御用件でしょうか？」

白の斯衛服を着る義父上に、私は片膝を着き、頭を垂れて言った。

ほしのげんさい
星乃現斉――

30後半とは思えない若々しく、眼鏡をかけるその姿は、10代半ばから後半と言っても通用する童顔の優男で、言動も変わらず柔らかいが、その内に秘めたる威厳は、在りし日のカタギリ司令を思わせる。

「空さん、そんなに畏まらずとも、大事な話と言っても、今日は貴方のことで呼びただけですから」

「私のこと、ですか？」

はて？呼び出しをくらうようなことはしていないが。

「はい。実はそろそろ貴方に教育係りを着けようという話になりましてね。本来なら、もう2年程あともよろしいのですが、貴方は精神の成熟が早いばかりか、勉学の覚えも良いと、うちでは鼻が高い程優秀な方。しかしそんな貴方にいち早く教育係りを着け、斯衛に送り出そうとする声があるのです」

そう言うとき義父上は申し訳なさそうな表情で苦笑いを浮かべていた。

「私の事はお気になさらず、義父上。私に包み隠さずにお話し頂き、ありがとうございます」

「お家事情に貴方を巻き込んでしまい、大変申し訳御座いません」

「いえ、これも武家に身を置きし身なれば、覚悟は出来ております」

そう私が言うと、義父上は悲しい表情を浮かべていた。

私のような義理息子に愛情を注いで育ててくれるのだ。この程度のお家事情を拒否する程、私は冷たい人間ではない。

「強いんですね、貴方は」

「弱くはないつもりです。3歳児の戯れ言ですが」

「貴方と話していると、気が楽になります。私も貴方のように強ければ良かったのですが」

義父上は黄の家の出だが、婿養子である義父上の発言力は、星乃家ではどうしても弱い。さらに義母上も腹芸が出来るような人でもない為、重鎮の言いなりなのは想像に難しくはない。だが義父上の表情を見れば、精一杯尽力したのは一目瞭然だ。

私は、まだ2年半ではあるが、この両親を心から愛おしく思っている。

2人が苦勞しないで済むならば、喜んでこの身を捧げ、重鎮の傀儡ともなろう。

だが私の想いと矜持と武士道だけは好きにはさせんがな……

そんな新たな決意も加わり、私はまた1年で色々自重を忘れることとなる。

と言うよりも、この世界で自重なんてしていたら戦車級に頭から丸呑みにされるわ!!

何周目かわからないが、まりもやみちるも助けなければな、それがかつての上官たる私の義務だ。

第二話 神童故のお家事情（後書き）

現齊さんのイメージは、四月一日君尋である。

第三話 自重のない神童

星乃空――

古き由緒ある星乃家本家に養子として引き取られた齡4の男児であるが、その名は様々な噂と共に武家中で話しの種にされていた。

星乃家始まって以来の神童と言われ、2歳の頃には、一般の大人ですら辞書で調べながら意味を解する英語で書かれた新聞記事を辞書なしで読むばかりか、独学で刀の型を振るい始めたやら、2歳にしてはあまりにも成熟し過ぎる物腰とその達観した見解と威容。

いくら武家の血筋であろうとも、2歳の子どもには当てはまらなさ過ぎるその姿に、中には神が憑いているのではないかとの噂もある。さらにここ最近では、現当主である星乃現齊と共に話しの場に出ては、重鎮達相手に腹芸をしてみせ、相手を容赦なく屈服させているという噂もある。

そんな根も葉もない噂が本人の預かり知らぬところで飛び交っていた。

「……………」

空は今、白の武家の共用？の場である修行場のひとつの山で、滝に打たれていた。

普通4歳の子どもでならば滝の水流と水圧に負けて流されてしまうようなものを、空は手を合わせ、眸を閉じ、直立不動で滝に打たれていた。

研ぎ澄まされた感覚は、ただ無を感じていた。

明鏡止水――

武を極めし達人が辿り着ける境地だ。

「ん？」

研ぎ澄まされた感覚が、人の来訪を知らせてくれた。

空は滝行を止め、少し離れた岩影で濡れた服を脱ぎながらその濡れた銀髪のしなやかな髪を以前と同じように丁寧に水氣を手拭いで拭いていった。

4年間切らなかった髪は、既に脹ら脛に達しようとしていた。髪型だけは13年も見続けた姿であることにこの頃は安心感と一抹の悲しさを感じる。

私は何も守れなかった。

部下も、仲間も、友人も、家族も――

眸を閉じれば、想起起こすのは一番楽しかった6年前か…

「フツ、我ながらに女々しいものだ」

鼻で笑いながら十分に水分が取れたところで、白く細い布で纏め上げた後ろ髪を結ぶ。ポニーテールの出来上がりだ。

しかし鏡を見ていないから後で直してもらうか……これで両脇の髪を姫カットにすればカタギリっぽくなりそうだな。今後の容姿次第で念頭に入れておくか……

次にインナーを着ようと思ったら、後ろから人の気配が来る。

「空様、やはりこちら……に……っ、し、失礼しました！」

振り返れば若葉色の髪の少女がそこにいた。

名は月詠真美――

今年10歳の私専属の遊び相手と言うか、面倒係りというか――

半年前に私の下にやって来た件の世話人が彼女だ。

しかしあの月詠家の出だけはある。

真美は10歳にしてはハイ……いや、廃スペックだ。

何せ意図すれば私でもニュータイプの力を使わなければ気配を読み

ない程に気配を隠せる。

さらに剣術もだ、今は身体が出来ていないからだろうが、どんな太刀筋も見極められてしまう。

正直自信をなくしそうになったのは内緒だ。

「真美、髪型大丈夫か見てもらいたい」

「は、はい、只今」

私はまだ一応4つだろうに、恥ずかしがることないだろうに。そういうのが真美の弱点だろうか？

「そう言えば、ヴォールク・データが入ったそうだが、やってはみたのか？」

「いえ、私はまだ戦術機の訓練を始めたばかりですから」

「そうか」

1979年――

昨年1978年、人類はBETAに対する一大反抗作戦『パレオ口ゴス作戦』を実施した。しかし結果は見事に大敗。だがソ連軍第43戦術機甲師団のヴォールク連隊がミンスクハイヴの突入に成功、連隊がほぼ全滅（F-4ファントム27個小隊、戦闘車輛240輛、

その他歩兵等約4300名のうち生存者はわずか14名のみ）したのと引き替えにハイヴ内部構造のデータ——通称ヴォールク・データの入手に成功する。

この作戦で得られた戦訓や実戦データを元に、その後のBETAに対する戦術・戦略の両面で大幅な見直しを現在行っている。

「いよいよ、本格的に人類もBETAの脅威をわかっただろうな」

ELS侵攻の折り、一丸となって戦った人類でさえ、刹那の対話間に合わなければ地球は終わりだったのだ。

ELSのように兵器に擬態することはなくとも、物量で勝るBETAに、たったの数国で勝てるわけがないのだ。

しかし、人類を一丸とするには、この世界は難しすぎる。

人同士で分かり合えるだろうが、国同士は難しいものがある。特にG弾なんて強力無比な力を手にし、唯一最前線国ではないアメリカの存在はだ。

降下ユニットのひとつやふたつ、アメリカに落ちないものかと時々思う。

他人より余裕な者は他の者を見下すように、いずれアメリカは自分達の思うがままに世界の脚を引っ張るだろう。というか、来るかもわからない戦後を考える頭お花畑の連中の考えが理解出来ない。それに逃げるなら自分達だけどうぞと言う感じた。爆弾の置き土産は

不要だ。

G弾の詳細なデータがないから詳細な予測を立てられないが、スパロボ系のG兵器のように結界されていない重力兵器をそう何発も使えば、重力異常で地球の重力が変わる可能性もある上に、残った土地を巡って争いにもなるだろう。

最低でも後10年、スワラージ作戦までにアメリカを牽制出来る物を作り上げ、その作戦に参加したいとも思っている。

自己満足だろうがなんだろうが、クリス力達を守ってあげたい。

彼女達を守れなかった贖罪だとしても……

「行くぞ真美」

「はっ！…ですがどこへ？」

「決まっている。戦術機のシミュレータールームだ。人類の剣が如何様なものか、試す価値があると見た」

「お、お待ち下さい空様！空様はまだ4つなのですよ？戦術機に乗るのは早すぎます！」

「聞く耳持たん」

私は特注の陣羽織を翻しながら歩を進める。後ろからは若干涙声の真美が着いてくる。ふむ、少し虐めすぎたか？

そんな毎日を過ごしながら、私は来るべき時に備え、少しずつでも着実に準備を始めることにした。

真美 side

私が空様の御世話係りとして着いて半年が過ぎました。

空様は神童と言われているだけあって、半年御一緒させて頂いている今でも、空様の行動パターンは推し量れません。

そして武においても、とても4つの男児が出せるような気迫や殺気ではなく、その質は私の剣の師範である紅蓮師範と同じように感じる時もあります。おそらく身体が御出来になられたら、私などあつという間に倒されてしまう、そう私には確信させる物を、空様は持っています。

そして神童と呼ばれる空様の实力は、それだけに止まりませんでした。

「くっ、稚拙な！私の道を阻むな！」

まさか戦術機をOSの助け無しに、すべてマニュアルで動かし戦闘ををすると言っ前代未聞の神業を私に見せて下さったのです。

今居るのは斯衛共用の戦術機シミュレーションルームで、空様は当直の兵に命じて少々強引に戦術機の私達のような子ども用の管制ユニットに入って行きました。しかも半年前、私がお着きして間もない頃に着始めた陣羽織のまま、すなわち衛士強化装備を着用せずです。

あれでは歩行時ですら激しい上下の揺れに苛まれるというのに、空様はそれすらねじ伏せ、空中機動までも行い。そしてこう言いました。

「動きが硬すぎる！これだから負ける！」

そう言ってOSをカット、マニュアル操縦で戦場を長刀2本と短刀2本のみで、師団規模のBETAを倒しきってしまったのです。

「……こんなものか、だがOSは全く持つて話にならん、これでは兵を無駄死にさせるだけだ」

そう言っ空様のひどく不機嫌な顔が、私は印象的でした。

初めて戦術機を動かしたが、操縦方法はそれほど難しくもなく、私がシミュレーションで使った撃震も良い機体だ。しかしOSがそれをすべて殺している。

被膜投影も慣れんな。

それに撃震だからか、空力制御もし難い。AMBAC機動も考慮されていらないからMS感覚では動かせない。辛うじてリアルドの操縦技術が応用出来るが雀の涙程度だ。

やはり早急に新たなOSの構築は急務だ。

マニュアル操縦出来たのは、私がそういう部隊でMSを動かしていたからだ。そうそう真似出来る技術でもない。まあ、巖谷中佐ならやってのけてくれそうだな。

管制ユニットから出たところで、周り是不気味過ぎる程に静かだった。大人達は阿呆のように口をあんぐりと開けていた。

「皆、どうかしたのか？」

「……御自分の胸に聞いてください」

「????」

真美の言う意味が理解出来ないのだが……

たった一万少し規模のBETAを斬り捨てただけだぞ。

「それが異常なことだとして理解ください」

「何を言うかと思えば、たった一万少しのBETAを斬り捨てただけだ。別に大したこともないだろう」

「空様は今日が初めての戦術機の搭乗なのですよ？初めてで、マニュアル操縦で、師団規模のBETAを、たったの1機の撃震で、しかも銃も持たずに接近戦だけで倒したのですよ！？これを異常と言わずに何を異常と言いますか！！」

真美が物凄い剣幕で私に詰め寄ってくる、あと1cmもなく唇が触れるぞ？

チュッ

「つつつつ！！！！！？？？？」

「隙ありだ。まだまだ修行が足りんな、真美。シャワーを浴びてくる」

あえて唇を軽く触れさせたが、10でも乙女は乙女だな、まるで顔から初期型の擬似太陽炉の如くGN粒子を噴き出しそくに真っ赤になつて――

この日、空が行った偉業のシミュレーションデータは瞬く間に斯衛軍を飛び出し、帝国軍中に出回ることとなり、空は白い悪魔だのなんだのと、衛士達の間では影ながら呼ばれることとなった。

第三話 自重のない神童（後書き）

様々なタイプのMSに乗っている空にとってはこの程度は朝飯前と
いうか昨日の夜飯昼飯朝飯前と言った感じ、つまるところ兎戯にも
等しかったり……ニュータイプは伊達じゃない！

第四話 動きだす者

私は自室で複数の紙の束を持って、部屋に入る。

中は中々に広い会議室で、そこには義父上に頼んで、日本の各工業企業の代表者が集まっていた。

「本日は急な呼び出しにお集まり頂いたことに心より感謝致します。皆様方には、私の息子、星乃空より重大な発表がありますので、どうぞご静聴下さい」

義父上の言葉で始まり、私の名の登場とマイクを握ったことにより、代表者達は眉をひそめる者がほとんどだった。

「お初にお目にかかります。紹介に上がりました星乃空と申します。実は本日お集まり頂いたのは、私の考案した戦術機とは根本から概念の違う新型人型機動兵器についてのプレゼンテーションを行う為であります」

その言葉に会議室はざわついた。

私はそれを無視して進める。

「私が考案したこの新型人型機動兵器——MSは、戦術機を圧倒する戦闘能力を持っています」

プロジェクターにユニオリアルドとガザCが映し出された。

さらに2機のスペックデータと戦術機との戦力、生産、整備性対比の詳細が書かれている。

「そ、空君、と言ったかな？君はこれが本当に造れると思っているのかい？」

1人の代表者が振るえ声で言った。

それもそうだ。同じバッテリー駆動のリアルドでさえ、F-4ファントムの何倍もの連続駆動時間がある上に、ガザCは基が作業用MSであり、それを私が大気圏重力下で問題なく運用出来るように設計を見直した。

実際、生産ラインを整えれば、撃震を1機造る間に、1機のガザCが補修部品込みの1セット、補修部品なしなら2機造れる計算にあり、パラジウムリアクターにより出力や機動性も問題なく、ビーム兵器も使用可能の量産機だ。コプセント的に移動砲台の色が強い機体なのだ。中距離支援機として、これほど勝手の良い量産機はそうはない。アクシズの厳しい台所事情に感謝だ。

そしてリアルドも、ブレイヴの開発データを参考にして、任意に変形出来る改良を入れた為、展開力と機動力は戦術機の比ではない。

ちなみにどちらのMSも、私の戦闘データを基にした擬似人格学習プログラムがインストールされている為、素人でも空中で光線級のレーザーを避ける事が出来る。

「現状の技術力であれば十分可能です」

私の言葉に更に会議室はざわつく。

義父上も苦笑いだ。なにせ最初に同じ物を見せた時には30分程固まっていたのだから。

「つきましては、私は皆様方にMSの開発を手伝って頂きたいのです」

代表者達の顔は固い。

やはりガゼCは良くとも問題はリアルドか……

百発百中を誇る光線級の攻撃を避けると言う発想がないからだとも思うが、私達の世界ではビームを避けるのは朝飯前でなければならなかったのだ。ようは慣れだ。

「光線級が現れて今日、私達の空は奪われました……」

私は代表者達の視線を引くように沈んだ声で言った。

「しかし、このリアルドが戦場を駆け、光線級を撃破し、制空権を取り戻せば！戦術機や兵の損失は激減するでしょう！今の人類の戦力では向こう10年20年戦っていられるのか、否！生きていますのかすら怪しいのです！！それほどに人類は追い込まれているのです！！対岸の火事事ではないのです！BETAに対して、私達人類は少しでも手を取り合い、一丸とならなければ！愛する者も、大切な物も、なにもかも失ってしまうのです！！」

目の前で、数の暴力にそれを経験した私だから言える。伝えられる。

「空、少し落ち着きなさい。ほら、お水ですよ」

「すみません、義父上」

かなり興奮し過ぎた。身体は熱く、喉がカラカラになってしまった。

私は義父上に頂いた水を一気に煽り、代表者達の答えを待つ。

これは無謀な博打とも言える。

既に世界で一定の戦果はある戦術機とは異なる全く未知数のMS。

しかし、ガザCはともかく、ユニオンリアルドは誰よりも知っている自負はある。

ちゃんとしたパイロットが乗れば戦術機など相手にならない戦闘力
を持っている上に、標準火器も戦術機のどれよりも強力なのだから

……

「……一度社に戻り、検討する余暇を貰えるかね？」

1人の代表者がそう言ったが、私は首を横に振った。

それに代表者は顔をしかめた。

「この状況が僅かばかりでも外に漏れるのは避けたいのです」

そう私が言うと、会議室の扉が開き、義父上に仕えるお手伝いさんが各代表者の前に有線式の黒電話を並べた。

「この場で判断して頂きたい。かなり不躰且つ性急過ぎるのはわかっています、これが外に漏れればどうなるのか、皆様方はおわかり頂けると思います」

世界の機動兵器の根底を覆すような物だ。まず間違いなく私は某国に消される。

ふむ、その時は戦術機にN2爆弾でも背負って自爆特攻するのもありか？

それともH L VにN 2爆弾やパラジウムリアクターを積み込んで爆撃するのもアリか……

私は微量のプレッシャーを垂れ流しながらもイスに座って動かない。

性急過ぎる考慮時間。

これらの情報流出による謀殺。

某国の横槍。

憂慮すべきことは山ほどだ。

しかし見返りは大きい。

未だ訓練士である真美にガザCに乗って貰い検証した結果、撃震と
のキルレシオは条件着きで1対48だ。

それはガザCの装甲が超硬スチール合金であり、戦術機の主兵装たる36mm弾では早々に墜ちはしないからだ。もっとも120mm弾は防げずに撃破されたが、武家の赤で接近戦に重きを置く斯衛の出身の訓練士たる真美が射撃戦オンリーでこれだ。ビームサーベルも使えば100機は落とせただろう。

このデータを表示した時の代表者達の顔は大層笑えたよ。

そしてリアルドのキルレシオは不明とある。

それは私が乗ったからであり、3時間ぶっ続けで軍規模を倒しても

結果が見えずに、不明としてある。

これには最早言葉もないらしい。

信じられないなら実際に実演しようかとも言えば、代表者達は動き始めた。

そして4時間後、ここにMS開発計画はスタートすることとなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1272v/>

空バカの行く絶望に染まるソラ

2011年7月26日15時15分発行